大学生サッカー部におけるオフザピッチの活動が競技力向上に与える影響の検討

東 海 林　　毅

要　旨

本稿は，大学生のサッカーの競技力向上とオフザピッチの活動の関係について検討することを目的とした。

大学サッカー部が実践しているブラインドサッカーを題材としたイベントの取り組みについて，中心的に関わった学生 7 名のインタビュー調査を実施し SCAT 法にて分析を試みた。分析の結果，「外部（一般社会）との関わり」「他者への想像」「ブラインドサッカーの意義」「サッカーとの関わり・影響」の 4 つの構成概念が抽出された。

オフザピッチにおける本イベントの実践は，学生たちのコミュニケーションの質的向上を促し，主体的な思考と行動が引き出されたと考えられる。こうした能力がサッカーをする前提となり大学サッカー部の戦績に影響したことが示唆された。

キーワード：スポーツ空間論，ブラインドサッカー，集団性，SCAT 法

Ⅰ．はじめに

1. 本研究の背景と目的

本研究の目的は，大学サッカー部でのオフザピッチにおける選手の活動が，サッカーの競技力向上にどのような影響を与えるかについて検討することを目指している。

スポーツコーチングの成果と言える「競技結果は運も含めて多様な影響要因によって左右される（日本コーチング学会，2017）」ものであり，社会背景や競技特性，国民性や地域性，メンバーの特性など様々な要因に目を向けることがコーチングを実践していく上で重要であろう。

「サッカーしか知らない者は，サッカーすらも知りえなくなる」という言葉は「戦術的ピリオダイゼーション[(1)]」の生みの親と言われるヴィトール・フラーデによるものである。彼はサッカー

のトレーニングを，サッカーを学ばせることと捉え，人間はどういう仕組みで学習するかということを突き詰め幅広い学問分野を学び，サッカーというスポーツの解釈，そのトレーニング理論の構築に生かした（林，2020)。また，フランシスコ・セイルーロはスペインのサッカーにおいて,「構造化トレーニング」を提唱した人物であるが，彼はサッカーを構造として捉え，フィジカルやテクニック単体でのトレーニングを否定した。そして，チームスポーツにおける個人の能力を 8 つの構造に分類し，その中には,「社会性」や「表現力」(他の 6 つは，生態エネルギー・コンディション・コーディネーション・認知・感情意欲・メンタル）をあげて，それぞれの構造が相互作用しあって「サッカー選手」という複雑な構造になっている，という考え方を示した(林，2020)。いずれもサッカー選手としての向上は技術的・戦術的・体力的な側面のみのアプローチでは十分でないことを示している。

サッカーを取り巻く空間は，日本では「オンザピッチ」と「オフザピッチ」の二つの空間に分けられるが,「オンザピッチ」はプレーが前提となる空間であり,「オフザピッチ」はそれ以外の空間である。大学とは教育・研究機関であり運動部活動にも教育的意義が求められる。神谷(2015）は運動部活動を結社と捉え，その組織・集団の活動を練習・試合だけでなく，社会・条件（スポーツを支える環境や政策）にも関わりうる場であるとしている。この活動が自治の追求であるとしてその教育的意義を示している。この練習・試合をオンザピッチ活動，社会・条件に関わる場をオフザピッチ活動に置き換えることができるが，大学部活動においてオンザピッチでは競技力向上のための追求がなされるがオフザピッチでは教育的意義が強調される。

筆者は 10 年間大学サッカーの指導に携わってきたが，大学生年代ではサッカーの技術・戦術・体力といった主にオンザピッチの活動だけではサッカー選手としての変化・成長は難しいと感じている。オフザピッチでの大学生活や日常・非日常の経験が人間的な成長や人格の形成につながり，これがパフォーマンスにも関係しているという仮説を立てている。

これらオフザピッチの活動に関して，芳地ら（2019）は，J クラブユース選手に対し，チームビルディング（TB)・プログラムを導入し，企業の人材育成や人材開発場面で用いられてきた組織開発ツールがユース選手にも適応できる可能性を示した。2 日間の TB によってセルフマネジメントスキルなどの認識が変化することを報告したが，これらオフザピッチでの活動が競技力向上に及ぼす影響については明らかにされていない。福富（2011）は，中学生年代におけるキャンプ経験がオフザピッチの行動の向上に影響し，オフザピッチ行動とパフォーマンスの間に関連性があることを示唆した。

このようなサッカー を取り巻く二つの空間における取り組みについて，日本においてのサッカーのパフォーマンス向上に向けた指針と課題では，選手育成に関して，技術力や俊敏性，組織力，勤勉性，フェアであることなどが示されている（JFA ホームページ・選手育成コンセプト)。

組織力や勤勉性，自律判断，駆け引きなどの能力はサッカーに特化したものではなく，一般社会で生きていくにおいても重要な能力である。日本のサッカーのコーチングにおいても，サッカーの技術・戦術・体力だけでなく，これらの能力を高めることがサッカーのパフォーマンスの向上には必要であることが示唆される。しかしながら，こうした能力の引き出し方については明らかになっている事例は少ない。

以上のようなサッカーの競技力向上を目指す過程では，サッカー選手としての向上は技術的・戦術的・体力的な側面のみのアプローチでは十分でないことが伺える。これまでオンザピッチでの活動としてサッカーの競技力を高めるための具体的な取り組みやコーチングに関する方法が検討されている。オフザピッチでの活動については，野外活動プログラムによるチームビルディングの有効性（久保，2010；東海林ら，2018）などが示されているが，競技力との関係が示されているものは少ない。

大学生年代はオフザピッチでの過ごし方については自由度が伴うため，競技場面以外のオフザピッチの活動は選手本人に委ねられる場合が多い。そこで本研究ではオフザピッチの活動が競技力向上のキーになるという仮説を設定し，その活動内容を具体的に示す。そして，オフザピッチでの活動環境の意図的な整備によるオンザピッチでの影響を検討することを目的とした。

2. スポーツ空間におけるオフザピッチの定義

スポーツの空間論に関しては荒井（2003）の「コートの中」,「コートの外」,「実社会」がある。荒井（2003）は,「コートの中」はただコートの中で「競う」空間だけを指すのではなく，その

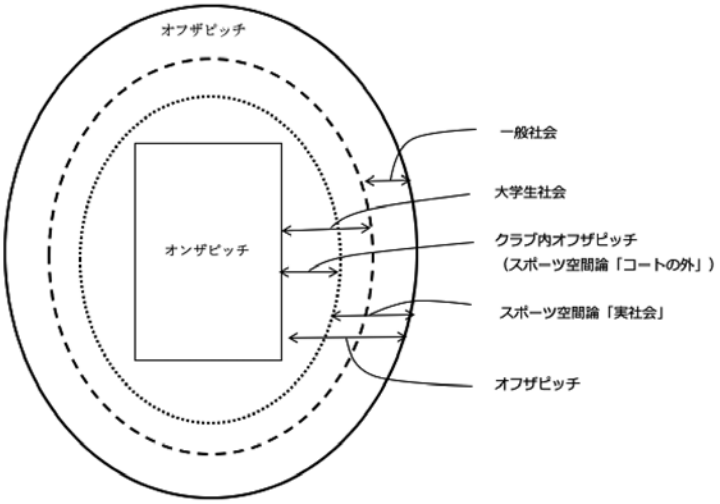

図1　オンザピッチ・オフザピッチ概念図

出典：荒井（2003）を改変

空間と実社会をつなぐ空間，いわば「コートの外」空間を豊かに想定することによって成立しているという認識が重要であることを示した。プレーが前提となる「オンザピッチ」は，荒井（2003）が示したコートの中と同じ概念である。また「オフザピッチ」は「オンザピッチ」以外の全ての空間を指すが，本研究では，荒井（2003）が示す「コートの外」という「ヤレヤレ」気分の空間という意味だけでなく，「オンザピッチ」とは異なったクラブ（部）内の役割のもと活動が行われる空間，加えて実社会も含む空間であるとした。ただし，この実社会は，大学生においては「一般社会」に出る前の心理的準備期間（エリクソン，2001）としての役割も含まれることから，「一般社会」とその内側に位置する「大学生社会」とした。本研究では，サッカーでの活動空間を「オンザピッチとオフザピッチに分け，オフザピッチは，クラブ内オフザピッチ活動を含む大学生社会と一般社会に区別される」と定義した。（図 1）

3. サッカーの特性

サッカーの特性について，「サッカーは他のスポーツと同様，何よりまず楽しみと健康のための身体活動であり，社会的観点から見れば，体育とスポーツの中で高度に発達し組織化されたチームスポーツの一つである。サッカーは社会的なルール遊びであり，その基本形態は戸外で行われるゴールライン・バスケット型ゲームに属する（シュテーラー，唐木（訳），1999）」である。また，「ゴール型」の集団スポーツ（サッカー，バスケットボール，ハンドボール）は，試合中のメンバー間の相互作用の機会が他のスポーツ種目に比べ多いとされており（持田ら,2014）ボール扱いに優れるだけではなく，状況に応じて瞬時かつ適切にドリブルやパスなどを選択する意思決定にも優れる必要がある（村川ら，2020）。さらに，「ボールゲームのチームは，他のすべての集団がそうであるように，共通の利害関係を基礎にしながら，協力，共同作業によって統一目標を追求する社会集団である」とされ，このチーム（社会集団）のボールゲームにおいて効果的なコミュニケーションと協力共同をよりよく行うためにプレーヤーに要求される人格として「集団性[2]」が必要とされる（シュテーラー，唐木（訳），1999）。この集団性が初めからサッカーに関わる全ての学生に備わっているわけではない。これはオンザピッチでサッカーそのものから獲得できる能力としては，限られた集団の人間関係では限界があると考えている。サッカーを離れたオフザピッチでの空間で様々な価値観を持った他者と関わりを持つことで，その集団性に必要な要素の選択肢は広がる。

以上のことから，サッカーはメンバー間の相互関係の中で，適切なプレーの選択や判断が要求される，社会という構造に類似した特性を持つスポーツであると言えよう。こうした特性を持つサッカーにおいてパフォーマンスを向上させるためには，オンザピッチでの技術・戦術・体力面に留まらず，社会的視点や組織力を高める取り組みが重要となる。

4. ブラインドサッカーをイベントの題材に選定した理由

本研究ではオフザピッチでの活動に関して具体的な事例として，ブラインドサッカーフェスティバルの介入をしている（以下，ブラサカと略す）。ブラサカは，フットサルをもとに考案されたスポーツであるが，その特性は，感覚を研ぎ澄ませ，声や音，仲間を信じる気持ちを頼りにプレーする5人制サッカーである（日本ブラインドサッカー協会ホームページ）。視覚を奪われた状態でサッカーをプレーすることは，より聴覚を頼りに動かなくてはならない。ボールには鈴が入っており，転がることで音を発しその位置がある程度わかる仕組みではあるが，転がらなければわからない。何を頼りにプレーするかと言えば，周囲の見えている人の声である。具体的には，試合中は，「ゴールキーパー」と「監督」，相手ゴール後方に位置する「ガイド」の3人のコーチングの声である。この3人のコーチングの具体性やタイミングが非常に重要である。ブラサカは，「コミュニケーションを密に図りながらチームプレーをする」「強い信頼関係が構築されないとパフォーマンスが高まらない」（ブラインドサッカー協会ホームページ／ブラインドサッカーの魅力と可能性）とされ，そこから導き出される重要な要素は，的確な質の高いコミュニケーション，視覚が奪われた状態（目が見えない他者）への想像，信頼関係である。

以上の理由からブラサカは「集団性」を高めるための介入プログラムとして適切と判断した。

5. ブラサカフェスティバルを成立させるための組織体制とイベント概要

R大学サッカー部では通常の部活に係る業務に関しては，「部署制」と称し，「総務部」「審判部」「広報部」などの縦割りの班編成を用いている。1年を通して各部員が各部署に配置されその役割を遂行していく。サッカー部としての通常のオフザピッチ活動は部署制によって機能している。これとは別にイベントなどを実施する場合のプロジェクトチームとして「委員会」が発足し，その都度「委員」が横断的に部内から選ばれる。ブラサカフェスティバルは，開催は8月のイベントであるが，2月にはコーチングスタッフと学生幹部（主将，副将，主務等）によってコアメンバーが選出された。その後学生間でイベントを成立させるための人員補強がなされ，最終的に3月に8名の委員が学生間より選出された。この8名を中心に準備が進められていった。

イベント（ブラインドサッカーフェスティバル）の概要（表1）と当日の組織体制と役割（図2）を以下に示す。

本研究ではイベントの詳細に関しては学生が主体的に取り組んだ2019年を中心に以下に記す。

イベント当日の内容・スケジュール（2019年8月11, 12日の2日間）

【8月11日】

表 1　イベントの概要

	第 1 回	第 2 回	第 3 回
目　的	地域社会，サッカー界への貢献，学生の障害者スポーツ・多様性社会・共生社会への理解を通じた人材育成		
テーマ	ブラインドサッカーを体感する	ブラインドサッカーを体感する	知ろう・学ぼう・見えない世界
時　期	2017 年 8 月	2018 年 8 月	2019 年 8 月
参加者	5 校約 100 名		
協力団体	ブラインドサッカー協会 埼玉 T-Wings		
学生の関わり	コーチングスタッフが中心となり企画・実行。学生は打ち合わせ帯同や決められた役割の遂行。ブラサカ委員の学生は外部団体との交渉や打ち合わせへの帯同，部内ミーティング，イベント当日の実行役として機能。	主導的役割はコーチングスタッフから学生へとその権限が委譲されていった。外部団体との交渉などは先ずはコーチングスタッフが主導し徐々に学生の主体的関わり方を高めた。部内の業務・役割は学生が主体となった。	第 2 回の振り返り・反省から学生主体で行っており，改善するための思考，行動を高いモチベーションで学生が実行。ほぼ全ての交渉や業務は学生のみで実行された。イベント内容の作成に関しても学生主導で，前年の反省を踏まえ入念な話し合いを経て，新たな試みが多く取り入れられた。

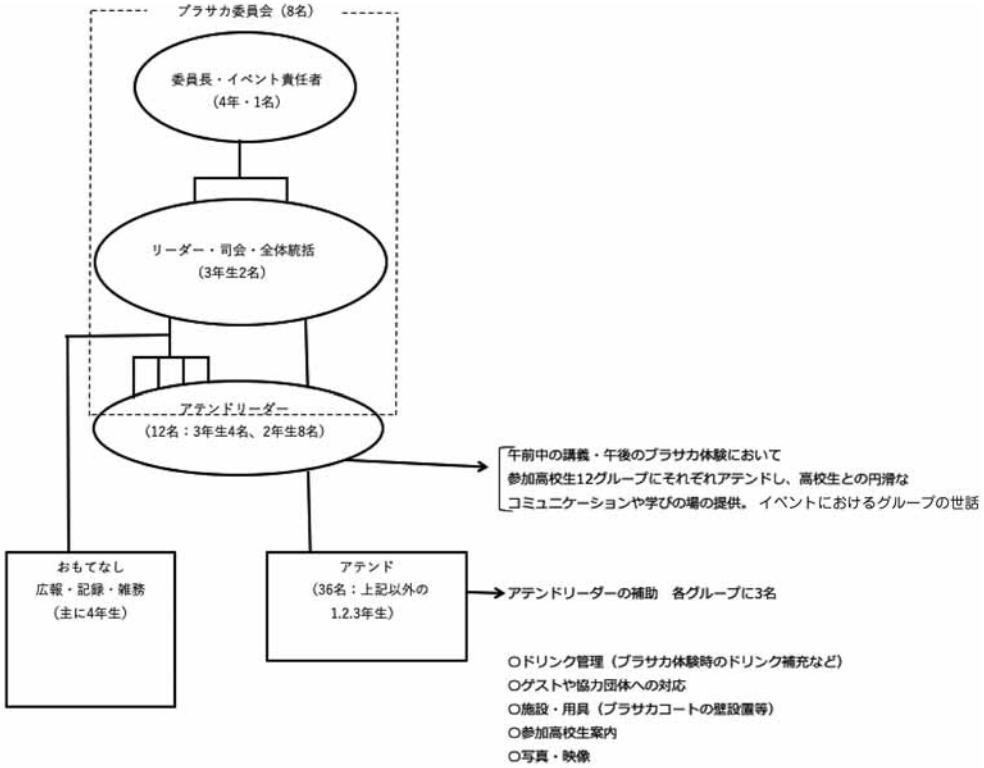

図 2　ブラサカ組織図（当日役割）

午前（第 1 部）講義形式

①　開会セレモニー

② ゲスト講演（元Ｊリーガー２名と学生司会者のトークセッション）

③ グループワーク（参加高校生約100名を12グループに分けて）

午後（第２部）ブラインドサッカー体験

① ブラインドサッカーエキシビジョンマッチ

R大学VS埼玉T-Wings

② グループに分かれてブラサカ体験（高校生12グループ）

【8月12日】

① ブラサカ体験振り返り（前日のグループに分かれ，アテンドリーダーがファシリテーターとなり高校生の振り返りを引き出す）

② 交流戦（参加校によるサッカーのリーグ戦，30分ゲーム総当たり）

③ 閉会式

Ⅱ．方　法

1. 実施時期と調査対象

1） イベントに関するミーティングの記録

2） 学生へのインタビュー調査

時期：2020年2月15日

対象：本イベント（第３回）の実行委員（大学生）７名

3） 競技力の指標としての戦績

R大学サッカー部の2016年～2019年のリーグ戦等の戦績

2. 分析方法

1） ブラサカフェスティバルを成功させるための活動内容とその準備

ミーティング内容はホワイトボードに議事録として記された。スマートフォンのカメラの撮影で画像データとして記録したものをテキスト化した。

2） イベント実行委員（ブラサカ委員）へのインタビュー

第３回のブラサカフェスティバルの実行委員７名にブラサカフェスティバルを通じた学びや意

義，サッカーへの影響などについて半構造化インタビューをグループインタビューとして実施した（4 名と 3 名に分けて 2 回実施，それぞれ 40 分程度）。本インタビューの実施時期はフェスティバル終了後約 6 ヶ月経過しているが，この 2019 年度のシーズンが終わり，イベント実行後のサッカーなどへの影響を冷静に振り返るに充分な期間であると判断した。分析には，大谷（2007）が考案した 4 ステップコーディングによる質的分析手法「SCAT（Steps for Coding and Theorization）」を用いる。これは面接記録などの言語データをセグメント化し，それぞれに〈1〉データの中の注目すべき語句，〈2〉それを言い換えるためのデータ外の語句，〈3〉それを説明するための語句，〈4〉そこから浮きあがるテーマ・構成概念の順に 4 ステップのコーディングを行い，それをもとにストーリーラインの記述を行うものである。

3）　R 大学の戦績について

2016 年度から 2019 年度までの「所属リーグでの順位」，「関東選手権大会」，「総理大臣杯」，「インカレ」の結果について「東京都大学サッカー連盟オフィシャルサイト」および「関東大学サッカー連盟オフィシャルサイト」，「全日本大学サッカー連盟オフィシャルサイト」より抽出した。

Ⅲ．結　　果

1．ブラサカイベント活動内容について

1）　ミーティングの実施内容

表 2 は 2019 年度のイベント実施に向けたミーティングについて，日程，議事，決定事項，検討事項の 4 つの項目について時系列にまとめたものである。当イベントの実施時期は高校生の夏の大会が終了する 8 月初旬であった。そのための準備は 4 か月前の 4 月からスタートしている。ミーティングは 2 週間おきに実施され，6 月中旬以降はほぼ毎週開催されている。ミーティングには可能な限りコーチングスタッフが 1 名以上オブザーバーとして参加するが，全て学生が提案，議論，進行していく（表 3 は第 3 回の振り返り議事録）。ミーティングの議事録では，ブラサカ委員たちは，高校生に伝える難しさを想定し，まずは自らブラサカを体験して委員間で共有し，いかに高校生にわかりやすく伝えるかについて試行錯誤している記録が見られた。また，外部団体との関係作りのため，その団体（ブラインドサッカー協会，埼玉 T?Wings）が関わる大会への応援にいくことの検討などが行われている。

表 2　ミーティング内容

	日　時	議　事	決定事項	検討事項
1	4月4日	ブラサカフェスティバルテーマの設定	「知ろう・学ぼう・見えない世界」（テーマ）普段とは違った世界を知ってもらい，今後の生活につなげてもらう。	懇親会の場所，高校選定，高校への挨拶やアポ取り，ブラサカへの挨拶の日程確定，予算配分
2	4月7日	昨年の振り返りの反映と参加校の決定	参加校5校，ブラインドサッカー協会へのコンタクトの日程	イベント目標，企画書作成
3	5月15日	要項づくりと人員決定と配置	要項作り直し	イベント協力者への依頼，講義のゲストスピーカー
4	6月5日	ブラサカ体験の心構え	なし	ブラサカイベントに不可欠な「壁」を探す。ブラサカ体験のフィードバックを選手内で共有すること
5	6月20日	ブラサカ体験の心構えとブラサカチームへの練習参加と試合応援	A チーム全員でブラサカ試合応援に参加する	参加高校が決定，1チーム不足のため，参加校を探す。フェスティバル実践に向けて準備するものを書き出す。
6	6月26日	前回の課題を見直し，改善点を議論	改善点を確認（試合時間や待ち時間に課題，講義のなかでの交流，同じ高校で盛り上がらず様々な他者と交流すること）。	ゲストスピーカーの選定について各自候補者へ連絡し打診する。
7	7月3日	ブラサカ委員がブラサカをできるようにするための練習日の把握と目標共有	必要なビブスなどの確認	当日，イベントに来れる人数の把握，ポール，壁の手配
8	7月11日	ブラサカグラウンドでのメニューの検討	リハーサルや練習内容の決定	高校生の宿泊施設の手配
9	7月18日	アテンドメンバーの役割の割り振り	ゲストスピーカーの講演内容の把握	アテンドメンバーの役割と実践
10	7月24日	予算編成，リハーサル実施の内容	ブラサカ交流試合の練習内容，協会への挨拶訪問	控室や弁当の手配など
11	7月31日	司会・アテンドの役割，講義のリハーサル，懇親会，弁当の手配	講義とグラウンドでの交流内容，懇親会の内容	イベントに向けた準備の確認
12	8月14日	次年度に向けた全体振り返り	別紙	別紙

表 3　ブラインドサッカー振り返り

講　義	グラウンド	開催する側としての気遣い
・チーム分けをスクリーンに映したら楽（場所　A・B・C…） ・インタビューする人も一緒に座る ・高校生に伝える内容がアテンドに伝わっていなかった ・伝えるべきことを全体で共有しておくべき ・どうしても同じ高校同士でしゃべっちゃう（席順） ・トラブルが起きた時の対応を考えておく ・最初に高校生の距離を近くするゲームなどを入れるべき ・自己紹介を盛り上げてやるべき ・アテンドの数を増やすのもありかも ・協賛してくれた各社へのお礼を忘れずに（ブラサカ委員） ・今年の活動を動画にしておく（3分くらいのもの） ⇒来年のスポンサー活動に繋げる	・伝えるべきことを全体で共有しておく ・外にいる人にも役割を与えたらどうか ・壁の中のメニューを統一するべき ・時間が長くなるとグダリつつある ・1つのグループを2つに分けて競争 ・メニューを自分たちで変化させていく ・PK のルールをしっかりやらせる（キッカーの目を隠すタイミングや待つ場所など） ・ルールの明確化 ・デモに熱を込めて（ちゃんとした見本を。やり方の統一） ・1 vs. 1 でのガイドの声が聴こえない（ゴールポストを叩けるものを横につける） ・1 vs. 1 を極める ・役割のローテーションを決めておく	・高校生にブースへ行くようにさせる ・エキシビションマッチの司会を決めておく ・攻撃の練習 ・役割を時間ごとに区切ってローテーションする ・大学生のグダっている姿を絶対に見せない ・指示を受け入れてほしい（他の学生） ・一般公開をするのか？（リスクもあるのでどう開催するのか） ・審判を1年にやらせるのはどうか（上級生が？） ・表彰式をしっかりやる ・荷物の準備を早めに ・ゲストの控え室のエアコンを入れるのが遅い ・ゲストの案内をしっかりやらせる（服装や姿勢） ・弁当はピッチ外で

2）インタビュー分析結果

SCAT 手法を用いて行なった分析結果を以下に示す。

インタビュー対象者の基本属性は表 4 の通りである。

インタビューを行った後，テープ起こしを行った 7 名の全テキストデータを SCAT 法における 4 ステップコーディングのフォーマットに落とし，分析を試みた。本稿では学生 D の分析例を表 5 に示す。残りの 6 名に対しても同様の分析を試みストーリーラインのみ表 6 に示す。分析

表 4　インタビュー対象者の属性

	学年	所属カテゴリー	ブラサカ委員回数	イベント当日の主な役割
学生 A	3	A	2 回目	第 1 部講義形式　司会 第 2 部体験プログラム　全体取りまとめ，進行役
学生 B	2	A	1 回目	第 1 部講義形式　高校生グループのアテンドリーダー 第 2 部体験プログラム　高校生グループのアテンドリーダー
学生 C	2	B	1 回目	第 1 部講義形式　高校生グループのアテンドリーダー 第 2 部体験プログラム　高校生グループのアテンドリーダー
学生 D	3	B	2 回目	第 1 部講義形式　司会 第 2 部体験プログラム　全体取りまとめ，進行役
学生 E	2	B	1 回目	第 1 部講義形式　高校生グループのアテンドリーダー 第 2 部体験プログラム　高校生グループのアテンドリーダー
学生 F	3	A	1 回目	第 1 部講義形式　高校生グループのアテンドリーダー 第 2 部体験プログラム　高校生グループのアテンドリーダー
学生 G	2	A	1 回目	第 1 部講義形式　高校生グループのアテンドリーダー 第 2 部体験プログラム　高校生グループのアテンドリーダー

※　学生・所属チームはイベント開催時点
※　所属カテゴリーは競技レベルで分けられている（高：A，低：B）

表 5　SCAT 法を用いた学生 D のインタビュー分析

番号	発話者	テクスト	〈1〉テクスト中の注目すべき語句	〈2〉テクスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテクスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）
1	聞き手	Dは 1 度経験した中でこのミーティングなどをどういう風に進めていくかのプランはあったのでしょうか。				
2	学生D	まだこっちの作る側に関わった事がない人が急に動き始めるというのは無理なんで，そこをいかにスムーズに自分たち 2 人が大事なことを手短に伝えれて，それをうまく飲み込んでやってくれるかっていうのを最初は大事にしてて，で，去年は一昨年ほどスタッフが意見，一昨年は結構くれてた印象があって，で去年は自分たちでっていうのが強かった分，あの，見えないところで足りない部分あったなと思って，スタッフKとかスタッフJとかスタッフHが言ってくれないと気付けない部分が結構あったので，そこをやっぱ少し足りなかったねっていうのを学生Aとはいろいろ言ってて，なので自分たちが見るところの幅を増やしてミーティング重ねていかないと，本番人数合わなかったりとか，メンバー表遅い，あと控え室の問題とか，ブラサカ委員だけじゃなくて全体にも伝えれるところを，やっぱ自分たちが上から伝える立場としてみていかないと全体まとめれないなって思った。	自分たちが見るところの幅を増やしてミーティング重ねていかないと，ブラサカ委員だけじゃなくて全体にも伝えれるところを，やっぱ自分たちが上から伝える立場としてみていかないと全体まとめれないなって思った。	経験者として未経験者の立場に立って伝えることと全体を俯瞰することでのリーダーシップ	未熟な他者への配慮，昨年の経験から本番で何をすべきか，誰にどう伝えるかの熟慮	イベントの構造的理解と他者のそれぞれの立場（個別性）を理解した上での全体への配慮 **《他者への想像》**
3	聞き手	どう高校生を動かしてスムーズに，飽きさせない，楽しめる，満足を得られる，というところは大変ですね。でもこれ自分たちでやってみる，やるっていうのがベースになったんでしょうか。				
4	学生D	高校生もそこまで興味持っていなかったっていう印象を自分のなかで持ってて，やっぱり朝早く集まってくれた高校生に対して，どれが正解というわけでもないですけど，ちょっと自分の中では，実際にやってみた時に少し押し付け感が出たのかなっていうような印象があったので。	高校生もそこまで興味持っていなかったっていう印象を自分のなかで持ってて，実際にやってみた時に少し押し付け感が出たのかなっていうような印象があったので。	高校生の反応が鈍く，こちら側の意図が少々外れた感じ	事前の想定の甘さ今回の現象の批判的分析	参加者側に立ったイベント，現象に対する客観的，批判的分析 **《他者への想像》**

5	聞き手	Ｄとしてはもっとどうしたかったっていうのはありますか。				
6	学生Ｄ	やっぱブラインドサッカーを広めるっていう意義の中では，楽しさを知ってもらうっていう部分ではそういうところが大事だっていう風に思ってて，そうするんであれば，高校生がもっと発言できる場にした方がよかったのかなっていう風に，やってては感じて，でもやる前には，やっぱどうしたら高校生が興味を持ってくれるかなっていうのを第一に考えるので，学生Ａの考えは間違いとかそういう話ではないし，むしろあれをやらなかったら，もし今年(有名人を)呼んでやるとかそういう話になったらまた同じ失敗をってなるかもしれないので，いい経験にはなったんですけどやっぱそこの課題は出たのかなって。	やっぱブラインドサッカーを広めるっている意義の中では，楽しさを知ってもらうっていう部分ではそういうところが大事だっていう風に思ってて，高校生がもっと発言できる場にした方がよかったのかなっていう風に，やってては感じて。	有名人ゲストは必要だが，参加者が受け身になってしまうことがいいのか	参加者の主体的関わりの必要性	他者の感覚・感情・受け止めかたの想像をもとに次回への課題抽出 **《他者への想像》**
7	聞き手	Ｄはどうでしたか。 打ち合わせとかもいろいろ行ってましたか。ブラサカ協会などとの。				
8	学生Ｄ	ブラサカ協会とＴウィングスさんの練習参加と基本的に全部顔出しているんですけど，それぞれの考え方が違う分全部を取り込むのは難しいというのが率直な感想というか，やっぱり自分たちが開催する１つのイベントだけで全て伝え切って，というのは，あっちとしても無理っていうのは分かっているし，じゃあどこを伝えたいのというのを自分たちがもう少し先に考えて提案してというのではないと，あっちもあっちで手いっぱいになっちゃうっていうか，こっちがある程度限定していって，ここはこうするべきではないですかっていう案を大方作っていかないとあっちも困ってて，Ｔウィングスさんとかはそういうよりかはシンプルにブラインドサッカーを楽しんでほしいという考え方のもと来てくれてると思うんですけど，協会の方はそれなりに広めるとか楽しさを知ってもらうっていう意思のもとやってるわけで，そこを自分たちがもっと深く捉えないと，自分たちは高校生を楽しませて知ってもらってですけど，あっちはもっと深いところで仕事をしてるっていう，ビジネスでって考えてると思うともう少し自分たちも対等なところまで考えを深めていった上でイベントを開催する必要があるのかなって，少しその熱意の差は感じました。	ブラサカ協会とＴウィングスさんの練習参加と基本的に全部顔出しているんですけど，それぞれの考え方が違う分全部を取り込むのは難しいというのが率直な感想というか，ビジネスでって考えてると思うともう少し自分たちも対等なところまで考えを深めていった上でイベントを開催する必要があるのかなって	主催者側として外部団体の特性，意図を考慮し進めるために必要なこと，もっと自分たちのレベルを上げることが必要。	外部団体の特性，意図の先取り，ビジネスレベルでの対等性の必要性。	それぞれの団体の特性や参加意義を理解しつつ，それに応えるための課題整理 **《外部との関わり》**
9	聞き手	もう３回やったけどこのサッカーフェスティバルをあえてブラインドサッカーでやるというところにどういう意義や良さがあるかと考えていますか。				
10	学生Ｄ	自分は学生Ｅと学生Ｇが言ったコミュニケーションと，学生Ｆも言ってた幸せとか，そういった部分が結構顕著に表れるというか感じられる部分で，そこが醍醐味でもあるし，普通のサッカーをやってる身からしたらすごい難しい競技なんで，そこがすごく感じられるし，それを高校生の年代で，しかも１年生でというのはすごい世界が広がるきっかけになれるし，っていうのが一番大きな理由で，で，自分は一昨年デフサッカーも少し見に行って感じたのは，障害者スポーツという枠組みで見ると，ブラインドサッカーって結構難しい枠に入るんだなって感じて，それをやっぱ自分たち大学生としてもどう噛み砕いて伝えてくかっていう段階を踏むので，成長できるところがすごい大きい，多いスポーツだなって感じ，そこがやる上ではすごく自分たちも意識してやるべきところかなと	普通のサッカーをやってる身からしたらすごい難しい競技なんで，自分たち大学生としてもどう噛み砕いて伝えてくかっていう段階を踏むので，成長できるところがすごい大きい，多いスポーツだなって感じ	難しいことを指導するという難題を如何に紐解いていくか，そこに成長の機会を見出す。	難題克服，その過程での試行錯誤がもたらす成長	このイベントに主体的に取り組む理由が明確化されている **《ブラサカの意義》**
11	聞き手	サッカー選手として結びつくことはありますか。				
12	学生Ｄ	サッカーですか，サッカーやる上で，そうですね，人を動かす力，サッカーやる上ですごく大事で，ディフェンス動かす時とか，やっぱ伝わりやすい言い方でいうのがあって試合やってる時とやっていない時間でどう伝えてっていうの，その人の特徴を見て，その人はこんな喋り方すれば伝わるよ，こいつはすぐ怒っちゃうから優しくいかないと，みたいな，一人ひとりに対する接し方考え方が，結構あれをやっていく上で，結構繊細なものだと思ってるんで，自分はブラインドサッカー自体が，そこはサッカーでも繊細にやれるところ，伝えられるところはあるんで，そこはつながっていくのかなって。	人を動かす力，サッカーやる上ですごく大事で，ディフェンス動かす時とか，その人の特徴を見て，その人はこんな喋り方すれば伝わるよ，こいつはすぐ怒っちゃうから優しくいかないと，みたいな，一人ひとりに対する接し方考え方が，結構繊細なものだと思ってるんで。	サッカーにおける他者との協同の重要性と，そのためのそれぞれの人間の特性を考慮しながらのコミュニケーションの個別性	サッカーとは協同，そのためのコミュニケーション	サッカーにおける相互関係という構造を理解した上でのコミュニケーションスキル **《サッカーとの関わり・影響》**
13	聞き手	ブラインドサッカーフェスティバルとＲ大サッカー部の競技成績には何か関係あると思いますか。				
14	学生Ｄ	多少なりともあるとおもう。主体性を持ってやるという部分では，今年もそうでしたけど幹部がああやってやっていくことがきっかけにはなっているのかなあ，大学生がただ淡々とサッカーをやって過ごす毎日よりかはあおいう刺激的なものが途中で入ってくるのはすごく選手自体考えさせられるもので，変わるきっかけになったのかなって。	主体性を持ってやるという部分では，すごく選手自体考えさせられるもので，変わるきっかけになった	本気でやることで，今までにない思考の質と量が変化を促した。	非日常の刺激，そこへの取り組みが成長の糧。	閉鎖的な学生生活の打破，非日常的活動，そこへの真剣な取り組みがもたらす主体性 **《サッカーとの関わり・影響》**
番号	**発話者**	**テクスト**	**〈1〉テクスト中の注目すべき語句**	**〈2〉テクスト中の語句の言いかえ**	**〈3〉左を説明するようなテクスト外の概念**	**〈4〉テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）**

ストーリーライン（現時点で言えること）	学生Ｒは第２回においてもブラサカ委員をやっており今回（第３回）は中心的役割を担っている。前回の経験は確実に活かされており，イベントの全体像を構造的に把握し，リーダー的立場で俯瞰することで本イベントを実行していった。その中で今回のイベントでの現象について，参加高校生の感覚，感情を想像し読み取り，より客観的，批判的に分析し次回へつなげることも考えている。外部団体との関係については，それぞれの特性や参加意義を理解しつつ，学生主体での対応に限界も感じているが，課題を整理し交渉や打ち合わせを実施している。ブラインドサッカーということに関しては，そもそも非常に難しいスポーツであると捉え，それを指導することはさらなる困難であることを理解し，そこをどう克服していくかの過程が本イベントに主体的に取り組む理由であると考えている。 サッカーへの影響は，相互関係という中で，コミュニケーションを相手との関係で，より繊細に，個別にとることが重要であるという理解につながっている。そしてこの学生にとっての非日常的活動に真剣に向き合うことで主体性が養われ，クラブの競技力向上に寄与していると考えている。

表 6　ストーリーライン

学生Ａ	学生Ａはブラサカ委員は前年に続き２度目であり今回の中心的・リーダー的人物である。前回の善し悪しを把握しつつ，学生主体を意識しながら積極的に外部・内部に働きかけている。対外的にも学生が主導となったことで，それを成長機会ということをモチベーションに行動している。コーチングスタッフは学生との距離感を意識しオブザーバー的に関わり，学生もアドバイスを受け入れながら，また，対外的（対一般社会）にも自分達の未熟さ，距離を認識し，思考し，積極的なアプローチで攻略しようとしている。ブラサカでのイベントについては，見えない世界，見えない他者を想像することで，人は優しい対応をすると感じており，言葉，音でのコミュニケーションの重要性を語っている。このようなコミュニケーションの重要性は，自分達ブラサカ委員のみならず部全体で獲得した効果であると考えている。また，本イベントにビジネス的側面を感じ取り，社会の構造的理解につなげようとしている。サッカーとの関わりとしては，イベントの構造をサッカーの構造に重ね合わせ，互換性を見出している。ブラサカイベントを追求していく上で，協調性を持ちつつ，役割を遂行し全員が満足を得ることの難しさを感じており，サッカーにも共通すると感じているのではないかと考えられる。
学生Ｂ	学生Ｂは前回（1 年生時）の問題として，1 年生の役割が明確にされていないことの問題を提起しつつ，今回はその問題を解決しながら，リーダーシップを発揮している。参加高校生の心理状況を想像しながら彼らを満足させるためのコミュニケーションを意識している。ブラサカ委員という責任と主体性がサッカーにも活かされていると感じている。
学生Ｃ	学生Ｃは本イベント準備段階において一般社会との接点の中でそのコミュニケーションの難しさと必要性を認識している。参加高校生が満足できたか把握しきれていない未熟さを認識している。ブラサカに対してはコミュニケーションが重要であるとして，そのスキルはサッカーにおいても活かせるようになったと感じている。
学生Ｅ	学生Ｅはブラサカ委員として主体性，積極性が欠如していることを認識している。ブラサカ体験プログラムの作成と実行という役割において，他者への想像力を働かせて行動していることが伺える。対外的な交渉の場面では自分の未熟な立ち位置を認識し次回への不安を抱いている。ブラサカへの気づきとして，普段サッカーが当たり前にできていることも実は当たり前ではないということ，また，自ら主体的にブラサカのトレーニング（体験プログラム）を構築することで，サッカーのトレーニングの構造的理解につなげている。
学生Ｆ	学生Ｆは本イベントの企画・実行の大変さをブラサカ委員をやることで気付かされた。他のイベントでの多様な人たちとサッカーをする機会に遭遇しサッカーの社会の広さを実感している。本イベントに関わることでコミュニケーションの質的向上を実感し，高校生にも伝える必要性を感じている。
学生Ｇ	学生Ｈは今回（第３回）初めてブラサカ委員になったが，あまり乗り気ではなかった。それは前回（第２回）をブラサカ委員ではない立場で経験し，「少しグダッちゃった感じがあったんで」というように課題を感じ，その難しさが抵抗感につながっていたようである。しかし，委員の役割意識と責任感での行動は，外部団体との接点という彼にとっての新たな経験を創出し，前回課題解決への積極的対応につながっている。特に外部団体との係りは，彼にとって非日常的で多様な人たちの存在に気付かされている。本イベントの全体像と構造的な理解が，膨大な準備の必要性を理解させた。ブラインドサッカーについては，コミュニケーションの重要性を参加高校生に教えることで，その重要性の自らの理解につながっている。コミュニケーションにおいて，伝達することに加え，聴く・傾聴することの大切さを気づかせたと考えられる。本イベントを通しての活動の主体性はオンザピッチにつながりクラブの躍進に関係していると考えている。

の結果，「外部（一般社会）との関わり」「他者への想像」「ブラサカの意義」「サッカーとの関わり・影響」の 4 つの構成概念が抽出された。

3）　戦績について

表 7 に示した。

2017 年から関東大学リーグ 2 部にて戦い，2108 年に 2 部 2 位となり関東大学リーグ 1 部[3] 昇格，2019 年は 1 部にて 3 位という戦績を残している。

表 7　R 大学戦績（2016～2019）

	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年
所属リーグ 順位	東京都大学リーグ 1 部 2 位（関東リーグ 2 部に昇格）	関東大学リーグ 2 部 8 位	関東大学リーグ 2 部 2 位（1 部昇格）	関東大学リーグ 1 部 3 位
関東選手権（アミノ杯）	2 回戦敗退	1 回戦敗退	1 回戦敗退	準優勝
総理大臣杯（全国大会）	—	—	—	初出場（ベスト 8）
インカレ（全国大会）	—	—	—	初出場（ベスト 8）
備考	12 年ぶりの関東リーグ昇格	関東リーグ残留	R 大学史上最高成績	R 大学史上最高成績

Ⅳ．考　察

1．段階的な権限・役割の移譲による学生の主体的な活動の引き出し方

本イベントの第１回は大学の記念事業という意味合いがあったため，コーチングスタッフが中心で実施した。その中で可能な限り学生に役割を与えたのであるが，その行動内容はコーチングスタッフの指示によるものが多かった。第２回はイベント実施のための多くの権限を学生に委ね，「学生主体」で進行することを目指した。なかでもその権限の移譲に関して，一番注意深く委ねていったものは外部団体との関係である。外部団体は本事業だけの取り組みのみならず，多くのイベントを実施しており，多忙な中で時間調整をし，学生の知識や理解が不足した場合のフォローなど相互に学生を育成していくという立場も兼ねている。すなわち，単にイベントを実施するということだけでなく，イベントを共に作り上げていく過程で学生の教育も必然的に兼ねることになる。こうした場合には学生のイベントに対する熱意や好意的態度が重要である。学生にとっては目の前にあるイベントの成功に向けた他者への想像と配慮が求められる。 学生たちは関係団体（ブラサカチーム）の出場する大会に応援に行くなどを実践し，彼らとの関係を強化させている。こうした態度の育成はオフザピッチでクラブ外の他者との関りの機会があるからこそ習得できる能力であると考えている。

さらにコーチングにおいても重要な示唆がある。学生に権限を移譲するタイミングやその塩梅である。学生が主体的になることによってもたらされる思考とそれに基づく行動をコーチとして想像することである。第２回はどこまで学生に権限を譲り主体的な関わりとするか，コーチングスタッフとしての判断が求められた。第３回は準備段階から学生主体でより意欲的に進められた。コーチングスタッフは進行状況などの把握に努め，求められたらアドバイスをするという範囲の関わりに留めた。イベント当日に向けて体験プログラム内容の精査やシュミュレ―ションなどの練習が繰り返された。７月末の最終準備段階では，重要な関東大学リーグの最中においてではあったが，サッカーの練習，つまりオンザピッチでの活動を削り，オフザピッチの活動であるブラサカ体験プログラムの全体練習に充てられることがあった。これはオフザピッチ活動としての本イベントがオンザピッチ活動への良い影響をもたらすという筆者をはじめとするコーチングスタッフの仮説に基づく判断であった。学生Ｄのインタビューから「このイベントに主体的に取り組む理由が明確化され」というように主体的に関わる姿勢が見られた。オフザピッチ活動としてのブラサカイベントでは，コーチングスタッフの関わりを意図的に制限し，さらに外部の力も借りて，段階的に権限を委譲したことが，学生の主体的な活動を引き出すことにつながったと考えられる。

2. 大学生が高校生を教え導くことが他者への想像につながる

本イベントは講義やテーマに応じたグループワークの実践とグラウンドでのブラサカ体験の 2 部構成となっているが，これらの内容はすべて学生が考えたものである。それらを制作・実践する過程では，「どのようにすると高校生が理解し達成感を得られるか」を想像し準備が行われた。入念な準備をしたつもりでも実際は「高校生が楽しそうに前向きに取り組んでくれない」と第 2 回のイベント終了後のミーティング内容（前回課題として 6 月 26 日のミーティング議事）にも見られるように，学生が予想した以上に指導は難しいものであったことが伺える。

こうした反省をもとに第 3 回の開催に向けての準備がスタートしたが，学生 G の発言からは「課題の認識と解決に向けた行動」が見られる。他者への想像，すなわち「他者の立場になって考える」ことは「それが自分たちのからだに降りかかったと想像し，自分のからだで感じること（諏訪・藤井，2015）」というように，ミーティング，練習，リハーサルにおいて，特にグラウンドでのプログラムについては繰り返し行われた。高校生という他者への想像力を，学生たち自らプログラムを経験し感じることで得た感覚を頼りに最大限発揮していたと考えられる。

3. サッカーへの影響

本イベントのリーダー的存在であった学生 D の発言から「イベントの構造的理解と他者のそれぞれの立場（個別性）を理解した全体への配慮」が見られた。高校生のみならず，部内のイベント未経験者の立場に立って考えることや，外部団体との交渉においても，「それぞれ（団体）の特性や参加意義を理解しつつ，それに応えるための課題整理」という構成概念が導き出された。こうした活動によってコミュニケーションの質（個別性，具体性，タイミング）の向上につながっていったのではないかと考えられる。「コミュニケーションとは，単に意思を伝達することだけではなく，理解されなければならない（スティーブン P. ロビンス高木（訳），2009）」というように，まずは相手の立場に立った理解と行動が必要となり，「他者の理解を互いに共有する（長谷川，2016）」ことが重要である。「集団性は社会関係，協力関係の質にかかわる特別な条件であるから，スポーツ選手の重要な人格特性として強調されることになる。集団性は教育と訓練過程での前提条件であると同時に結果である（シュテーラー，唐木（訳），1999）」。とあるように，すなわち学生のサッカーをする前提を改めて整えることができたということが言えよう。さらに，学生 D の発言からはイベントと競技力の関係について「非日常的活動に真剣に向き合うことで主体性が養われ，サッカー部の競技力向上に寄与している」ということが見られた。彼はブラサカを高校生へ指導するという困難な課題を克服していく過程で主体性が引き出され，この主体性が競技力向上にも関係していると感じている。学生 G においてもイベントを自分達で作り上げ

ているという主体的な行動がオンザピッチ，すなわちサッカーの競技的場面においての主体的な判断や行動につながっていると感じている。竹村ら（2013）はスポーツ・セルフマネジメントスキルという概念を，選手自身が主体的に思考・行動し，実践する自己活用力であるとし，集団の競技パフォーマンスに影響を与えるとしている。本イベントにおいても学生たちの主体的な思考・行動が競技力に影響していることが考えられる。

この３回のオフザピッチの活動により，学生の主体的に思考・行動する力が引出され，またサッカーをする前提を整えることができた。前提とは「ある物事をなす土台となるもの（広辞苑）」であり，選手としてサッカー部としての土台を少しずつ築いてきたことが，R 大学の戦績に影響していることが考えられる。目の前のオンザピッチの課題克服にエネルギーを注ぐだけでなく，学生の人間的成長を促すオフザピッチの活動が競技力にも影響することが示唆された。

4. オンザピッチ・オフザピッチそれぞれの空間で獲得されることの共通性と互換性

学生 A のインタビューから導き出されたストーリーラインから，「イベントの構造をサッカーの構造に重ね合わせ，互換性を見出している」とあるように，学生 A は本イベントを構造的に把握しようとし，それをサッカーに置き換えることでサッカーをより構造的に理解しようとしていることが伺える。サッカーの構造的理解の必要性として，例えば，「サッカーのみならず全ての球技のゲームは局面構造として，『序盤→中盤→終盤』という文脈で局面を解釈することができる（日本コーチング学会，2019）」が，「序盤は相手も出方を観察しながらプレーする」ことが必要であり，「中盤ではお互いの戦術が分かり，戦術変更を考慮しながらプレーする」など，同様の局面（現象）でもプレー選択の判断は異なってくる。さらには，局面構造だけで判断が為されるわけではなく，目的–課題–手段の関係性を構造的に把握する（日本コーチング学会，2019）など，関係構造や空間構造など多岐にわたる構造を理解することが選手自身の判断力に直結すると考えられる。一般社会にも接続するオフザピッチの活動経験により，オンザピッチでのサッカーを違った角度から眺め理解することを可能にしたと考えられる。しかし，学生 A は２回目のブラサカ委員を経てこのような思考に至ったのではないかと考えられ，多くの学生がこのような思考に到達しているわけではないだろう。

先述したように，サッカーは社会という構造に類似した特性を持つスポーツである。一般社会とサッカーは共通することも多いと考えられ，互換性を持つことでそれぞれの気づきを促すことができるということが示唆された。

V．おわりに

本研究は大学サッカー部のコーチング実践において，オフザピッチ空間での活動としてブラサカを題材にしたイベントを取り上げた。本イベントが学生たちのコミュニケーションの質的向上を促し，集団性を獲得することでサッカー選手としての前提を整える，つまりサッカー選手の土台を築くことができた。

このようなオフザピッチの活動が他者への想像や主体的な活動につながり，その広がりがオンザピッチでのサッカーのパフォーマンスにも影響を与えたと考えられる。しかしながら，今回の研究では調査対象者が 7 名に留まり全体の傾向を把握するには限界があったと考えられる。また，イベント参加者の反応を調査・提示できておらず，彼らの満足度や効果を測りイベントの有効性を示すには至らなかった。そして，サッカーはオフザピッチ活動だけで成り立つものではなく，オンザピッチでの技術的・戦術的・体力的側面との詳細な関係性を明らかにしていくことが求められるだろう。

《註》

（1） 1960 年代後半にヴィトール・フラーデ氏によって提唱された。戦術的ピリオダイゼーション（PT）とはこれを採用している（当時）チェルシー FC 監督ジョゼ・モウリーニョ氏の，UEFA チャンピオンズリーグ優勝 2 回，欧州 3 大リーグ制覇という輝かしい成績によって，隣国のスペインやイングランドのみならず，オランダやブラジル，ウルグアイ，アルゼンチン，コロンビア，さらにはアラブ諸国においても急速に広まりつつあるトレーニングメソッドのことである。PT はトレーニグメソドとしてだけでなく，ある種のスポーツの実践思想として，サッカー界に強いインパクトを与えている。なぜなら，PT においては「サッカーとは何か」「集団スポーツゲームとは何か」ひいては「スポーツとは何か」という原理的な問いに対する思索がなされている（木庭，2015）。

（2） プレイヤーの人格特性としての集団性は

1. トレーニング仲間や味方のプレイヤーたちと親しくつきあい，開放的であること（待つとか「やってもらう」ような消極的行動をしない）。
2. 味方のプレイヤーの気持ちをくんだり，進んで相手の立場になって考えること。また，味方のプレイヤーの悩み，個人的事情を理解してやること。
3. 進んで他人を助けてやること。訓練や試合中に強い者が「苦労を引き受け」たり，味方のプレイヤーの弱点や失敗をカバーしてやること。
4. 責任分担体制，ポジション別の役割分担体制に自発的，積極的に加わり，従うこと。
5. 味方のプレイヤーの考え方の相違やズレを進んで積極的に克服し，取り除き，集団の目標を設定するために共通の見解を得ようとすること（シュテーラー，唐木（訳），1999）。

（3） 年間 2 回実施される大学生の全国大会である総理大臣杯全日本大学サッカートーナメントと全日本大学選手権（インカレ）の過去 5 年間（計 10 回）の優勝大学を見ると，関東大学サッカーリーグ 1 部所属の大学が 8 回（5 大学）制している。このことから日本で最もレベルの高い大学リーグである

と言えよう。

参考文献

荒井貞光（2003）クラブ文化が人を育てる．大修館書店，pp. 63-70.

一般財団法人関東大学サッカー連盟オフィシャルサイト．https://www.jufa-kanto.jp/

一般財団法人全日本大学サッカー連盟オフィシャルサイト．https://www.jufa.jp/

E. H. エリクソン・J. M. エリクソン：村瀬孝雄・近藤邦夫訳（2001）ライフサイクル，その完結．みすず書房，pp. 99-10.

大谷尚（2007）4 ステップコーディングによる質的データ分析法 SCAT の提案。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，54(2)，pp. 27-44.

神谷拓（2015）運動部活動の教育学入門．大修館書店，pp. 273-283.

久保幸平（2010）サッカーの一貫指導における外活動プログラムの役割とその可能性について．びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ開発・支援センター年報，6: 25-32

公益財団法人日本サッカー協会ホームページ／選手育成のコンセプト．http://www.jfa.jp/youth_development/outline/

G. シュテーラー・I. コンツァック・H. デブラー・唐木國彦監訳（1993）ボールゲーム指導辞典．大修館書店，pp. 30-213.

スティーブン P. ロビンス：高木晴夫訳（2009）組織行動のマネジメント．ダイヤモンド社，pp. 225-226.

諏訪正樹・藤井晴行（2015）知のデザイン．近代科学社，pp. 5-6.

竹村りょうこ・島本好平・加藤貴昭・佐々木三男（2013）スポーツ集団における学生アスリートのセルフマネジメントに関する研究：スポーツセルフマネジメントスキル尺度の開発.体育学研究 58(2)，483-503.

東京都大学サッカー連盟オフィシャルサイト．http://www.f-togakuren.com/

東海林毅・渡邉仁・飯田義明・佐々木亮太（2019）野外活動プログラムがチーム組織力（チームビルディング）向上に与える影響の検討：関東リーグ 1 部昇格を目指す R 大学サッカー部を事例として．フットボールの科学，14(1)，42.

日本コーチング学会編集（2017）コーチング学への招待．大修館書店，p. 68.

日本コーチング学会編集（2019）球技のコーチング学．大修館書店，pp. 34-36.

長谷川眞理子（2016）進化心理学から見たヒトの社会性（共感）．認知神経科学，18, 108-114.

林舞輝（2020）「サッカー」とは何か．ソル・メディア，pp. 16-155.

福富信也（2011）ジュニアユース年代のサッカー選手に対する長期チームビルディング　合宿の効果に関する研究．東京電機大学総合文化研究，9

芳地泰幸・山田泰行・青葉幸洋・岩浅巧・江波戸智希・水野基樹（2019）J クラブユース（U-18）選手の人材開発を目的としたチームビルディング・プログラムの導入とその効果の検討．スポーツ産業学研究，29(2)，125-135.

持田和明・高見和至・島本好平（2015）チームスポーツ競技における集団凝集性および集団効力感に影響する個人要因の検討：構成員のライフスキルが集団に及ぼす影響．スポーツ産業学研究，25(1)，25-37.

村川大輔・幾留沙智・高井洋平・小笠希将・森司朗・中本浩揮（2020）サッカー選手における意思決定能力と潜在的パターン知覚の関係．スポーツ心理学研究，47(2)，57-74.

Examining the Effects of Off-the-Pitch Activity on Competitiveness in a College Soccer Team

Takeshi Tokairin

Abstract

This paper examines the relationship between the development of competitiveness in university soccer players and their off-the-pitch activities. We interviewed seven students regarding their participation in an event to experience blind soccer organized by their university soccer team and analyzed their responses utilizing the SCAT method. Through this analysis, four constructs were determined: "Relationship with the outside (general society)," "empathy for others," "significance of blind soccer," and "relationship with and influence on their soccer." Participation in this off-the-pitch event appeared to have improved the quality of communication between students and elicited independent thought and action. It is suggested that these traits are essential for success in playing soccer and impact the results of the university soccer team as a whole.

Keywords: sport spatial theory, blind soccer, collectivity, SCAT method